

川崎市文化協会会長賞

わたしの恐竜愛

東小倉小学校 5年生 金田 志歩

「ドシーン、ドシーン、ガオ～～！」

恐竜のフィギュアで遊んでいた。小さい子どもではないけど、つつい遊んでしまう。恐竜のフィギュアで遊んでいるのは、恐竜が大好きだからだ。肉食恐竜にはするどい牙やつめがあり、草食恐竜には肉食恐竜から自分の身を守るために色々な武器がある。そのどちらもとてもカッコいい。

「志歩ちゃんって変わってるね。」

「なんだか男の子みたい。」

友達に何度も言われたこの言葉。別にきずついているわけではない。

「金田さんのいつも明るくてやさしい性格とはギャップがあるね。」

四年生の時の先生にも、そう言われた。でもそんなことを何度言われようと、わたしの恐竜愛はおさまらない。恐竜は、わたしの姉妹なのだ。家族なのだ。

つかれた時、あきらめかけた時に、恐竜が前に進むすがたを思いうかべると、わたしの心に火を灯し、わたしも前に進もう、と気がふるいたつ。だからわたしは、恐竜に関係するお仕事につきたいと思っている。そこで思いついたのが、古生物学者。最初は恐竜研究者と思いついたのだが、あまりしっくりこない。しかも、恐竜研究者は恐竜のことしか研究しない。それにくらべて古生物学者は、かんたんにいうと、色々な生物を調べることができる。くわしく具体的にいうと、こんな感じ。昔から今まで大きく三つの時代に分けられる。まず、海にしか生物がいなくて、大陸が一つだったころが古生代。次に、恐竜が生きていた時代が中生代。そして、今わたしたちが生きていた時代が新生代。古生物学者はその三つの時代の生物のことを調べることができる。そこが、古生物学者の長所だ。

なぜこんなに恐竜が好きか。それは、三年前の二年生の時が始まりだった。二年生の時に、たまたまテレビをつけたら、「恐竜超世界」というお話をやっていた。それにでてきたモササウルスという海に住む海竜の物語にとっても感動して、恐竜に興味をもちはじめた。そして、三年生の時の担任の先生だった青柳先生も、わたしと同じ、恐竜好きだったから、話がとても合って楽しかった。恐竜の話をたくさんして、わたしの恐竜愛はふくらんだ。

古生物学者になるためには、まず恐竜の種類と特徴を覚えることが基本。そして、昔考えられていた恐竜のすがたと今の恐竜のすがたはぜんぜんちがう。たとえば、羽毛が生えているかどうか。特に、肉食恐竜の体に羽毛が生えていたそう。実際に、羽毛のあとが残っている、シノサウロプテリクスという恐竜の化石がある。そして、この恐竜は、しっぽがレッサーパンダのようにしましなことが分かっている。このように、化石がぜんめつした恐竜のすがた形のヒントなのだ。

わたしは一番ベロキラプトルという小型の肉食恐竜が好きだ。このラプトルは、この星で二番目に知能が高い。その高い知能を生かし、集団で協力して狩りを行っていた。計画的に作戦を立て、え物をおいこむ。だが、作戦を立てるには、言葉が必要だ。もちろんラプトルたちはこの言葉をもっている。仲間をよぶ声、助けを求める声。様々な鳴き声を発し、仲間とコミュニケーションをとっていた。だから、もし恐竜をぜつめつさせた大変動がなかったら、ラプトルが人間にかわって地球を支配していたかもしれない。その可能性は十分ある。さらにこのラプトルには羽毛が生えている。羽毛は鳥への進化のきっかけだ。ということは、鳥は恐竜の子孫なのである。だからわたしは、鳥も好きだ。

くらべてみると、足の形がそっくりなのだ。足だけ見ると、どっちがどっちかわからない。このように、恐竜の特徴や鳥への進化などを調べていったらわたしの恐竜愛は、ますますふくらんでいくだろう。